1B-1-2

特別養護老人ホームにおける作業療法士と介護職員の利用者理解に関する一考察

滝澤　英明[1)]　竹原　　敦[2)]
[1)]特別養護老人ホーム万世園　[2)]山形県立保健医療大学

【はじめに】

特別養護老人ホーム（以下特養）において，利用者のリハビリテーションニーズに応えるためには，作業療法士（以下OTR）と介護職員（以下CW）との連携が必要不可欠である．宇佐美らは，CWとの連携を得るためには作業療法（以下OT）の啓発をしていくことが今後最も重要な課題と述べている．こうした課題を解決する方法の一つとして，OTRがCWに対し共通した利用者理解を促すことができるOT評価を提示する必要があると思われる．本研究では，高齢者領域で広く用いられるパラチェック老人行動評定尺度（以下PGS）が，OTRとCWの共通した利用者理解をもたらす評価となり得る可能性を検討した．

【方法】

本研究は2つの調査から構成された．

調査1　対象：特養に入居する利用者39名，男性6名，女性33名，平均年齢84歳SD8.8．手続き：全対象の①改訂長谷川式簡易知能評価スケール（以下HDS-R），②CWへの聞き取りと観察評価によるPGS，③介護度の情報を得た．分析方法：PGSとHDS-R及び介護度の関連についてSpearman順位相関を求めた．

調査2　対象：CW19名，男性4名と女性15名，平均年齢49.1歳SD11.4，平均介護経験100.7ヶ月SD54.9．手続き：対象に趣旨を説明した後，「特養における利用者評価選択のためのアンケート」を実施した．アンケートの内容は，①介護度，②PGS，③HDS-R，④ケアプラン，⑤生活歴，⑥年齢の情報について，A．利用者の介護を行う際に参考にする程度，B．より良い介護を行うために重要視する程度及びC．PGSが介護に役立つ程度（身体，精神，認知症，声がけ，円滑な介護）について，「とてもそう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の4件法で回答を求めた．分析方法：介護経験の期間と各項目の関連についてSpearman順位相関を求めた．さらに，各項目の参考にする程度，重要視する程度及びPGSが介護に役立つ程度についてχ^2検定を行った．

尚，データ収集について特養施設長の許可を得ると共に，調査対象に趣旨説明と同意を得た上で対象が特定しないよう数値化し統計処理を行った．

【結果】

調査1：PGSと介護度（r=－0.87，P=.000）及びHDS-R（r=0.86，P=.000）において有意だった．

調査2：回収率は100％だった．介護経験は，B．より良い介護を行うために重要視する程度の介護度（r=－.46，p=.046）及び生活歴（r=.586，p=.008）において有意だった．また，CWはPGS（P=.001）を参考にする傾向が低かったが，介護度（P=.000）とケアプラン（P=.018）を参考にした．さらに，より良い介護を行うために介護度（P=.000），HDS-R（P=.008）と年齢（P=.001）を重要視する程度が高く，PGSが介護に役立つ程度は，身体的側面（P=.008）と認知症の側面（P=.024）であった．

【考察】

介護度やケアプランは，CWにとって利用者を理解しやすい情報と思われる．また，HDS-Rと年齢は，認知症の有無や加齢による機能障害等を把握し介護を行う際に重要視さていると考えられた．しかし，PGSはCWが参考にする程度が低かった．これは，第一筆者がPGSを特養に導入して5ヶ月という短期間のため，CWに十分に理解されていない可能性が考えられる．しかし，介護の際にPGSが身体及び認知症を知る上で役立つと捉えていることは，介護度とHDS-Rとの有意な関連が認められたことを裏付ける結果となった．さらに，PGSは身体機能と身辺処理以外に社会的行動の側面を評価している点が関連するとも思われる．

介護経験が増すと介護度を参考にはせず，生活歴を参考にする傾向がみられた．この点も身体機能と身辺処理だけではなく，PGSの社会的行動に含まれる他者の手伝いや集団での交流といった，これまでの生活に準拠した側面を介護に活かしているとも考えられ，PGSの社会的行動に共通した利用者理解の糸口の可能性が示唆された．

今後はKingが述べるように，CWがPGSを用いることにより，OTの視点で利用者へ介護できるよう，CWを支援することが必要と考えられた．